

(創世記24：10～67)ここは、アブラハムの祝福の継承の記事です「私を、私の父の家、私の生まれ故郷から連れ出し、私に誓って、『あなたの子孫にこの地を与える。』と約束して仰せられた天の神、主は、御使いをあなたの前に遣わされる。あなたは、あそこで私の息子のために妻を迎えなさい。」(7)アブラハムは神様に「子孫を星のように・・・」と約束されていましたが、子どもが生まれませんでした。途中サラの女中に子どもを産ませたこともありましたが、最後、サラから生まれたのがイサクでした。そのイサクは40歳近くになっていましたがまだ妻を持っていませんでした。晩年、アブラハムはそのことを心配し、敵のいるカナン地ではなく、アブラハムの生まれ故郷であるナホルの町からイサクの妻を迎えようとしていました。そこで命を受けたのがしもべでした。アブラハムがしもべに頼んだ命令は非常に重圧でした。カナンの地からナホルに戻るまでは、危険もたくさんある、もし自分が任務を果たさなくては、アブラハムの神様との約束は廃れてしまうし、イサクの存在が無意味になってしまう・・・自分の行動一つで全てがなくなってしまうからです。そういう背景の中で行かなくてはいけなかったのでもしは「もし娘がいなかったら・・・」とアブラハムに聞きます。そこでアブラハムが言った言葉が、『私は主の前を歩んできた。その主が御使いをあなたといっしょに遣わし、あなたの旅を成功させてくださる。あなたは、私の親族、私の父の家族から、私の息子のために妻を迎えなければならない。』(40)でした。私たちは神様に大事な任命を与えられています。イエス様はこの地で教会を花嫁にしようとしていました。しかし今、教会は花嫁としてふさわしいでしょうか。花婿が来る前に10人の花嫁のうち9人が去り、残りは一人という状況になってしまっていますがそれでよいのでしょうか。アブラハムがしもべに頼んだ命令は今教会に託されています。花嫁を捜さなくてはなりません。それは元居た地、つまりあなたの親しい人からです。「不撓不屈」という映画があります。これは国家と戦った「飯沼さん」という一人の税理士の姿を描いています。「不撓不屈」とは絶対に曲げない、まっすぐやりとげるといことです。アブラハムもそういう人でした。だから絶対に曲げませんでした。ロトは真逆でした。目の欲に負け自分の利得に走ってしまいました。あなたには使命があってそれをあなたが果たさなかったら、あなたに任された人の全ての祝福が留まってしまう、あなたはそのような重圧を感じることがあります。明治時代、天皇統治国家を再び作ろうとしていた日本は、キリスト教国家であり、神様を中心として作られた君主制の強いドイツの「プロイセン憲法」基に「大日本帝国憲法」を作りました。私たちは自分たちの土台をしっかりと知っておく必要があります。そうでなければいくら神様のことを知っていても形だけのクリスチャンになってしまうからです。神様が聖書を土台にした憲法を日本に与えたのは日本をもう一度聖書にあるとおり、「日の昇る国」として神様のところに帰る時にそこに「神」というものをもう一度置くためです。日本の憲法の基となったドイツは、その後人を神様にし、神様をないがしろにしてしまったために、最終的にどんどん崩壊していきました。また日本もそうです。その憲法を利用して一人の人をつぶそうとした国家、それに屈せず従った一人の税理士、その結果今の憲法の前文に「税理士たるもの国税庁の中間機関ではなく、自分の意志によって行動できる」と書かれるようになりました。「偉大とは、人生に方向を示すことである」(ニーチェ)イエス様がしたかったことは方向を示すことであり、アブラハムは示された方向を信じて進む人でした。あなたが今重圧を感じているならその道を進んでいるということです。あなたは正しい良識を持っていますか。ある日神の使者があなたの目の前に訪れたとき、正しいことができるでしょうか。しもべやリベカのようにいつも美しく着飾っていますか。またリベカの家族のように「神のしたこと」と言えるでしょうか。あなたの心の中にいつも危機感や重圧があるでしょうか。自分のとった行動や発言ひとつで、人々が変わってしまうのです。キリストの花嫁を捜しにいくためにあなたは選ばれています。あなたの働きをするために、出て行かなくてはなりません。そのあなたの心の中に、しもべやリベカのような心があるか、リベカの家族のように「神のしたことなら従います」と言う気持ちがあるかももう一度考えてほしいのです。不撓不屈の主人公である飯沼さんは、クリスチャンではありませんでしたが、どんなに叩かれても、自分のただ一つの良心に従い、決して屈しませんでした。であるならば、クリスチャンである私たちにはできるはずで、「あなたはこの地では患難に会いますが勇敢でありなさい」私たちが求めているものはこの地のものではないからです。重圧は楽なものではありませんが悪いものではありません。物が豊かな時代ですが、人の心をとても苦しめています。そういう中であって私たちは花嫁を捜さなくてはなりません。そして人々の心を変える愛を持った励ましをしなくてはなりません。赦しあい、愛しあい、励ましあい・・・「あう」がなければ一人よがりです。あなたが本当にこの「合い(愛)」の気持ちを持っていれば人々に伝わるはずで、しもべはいらないことを話す前に、語るべきことをきちんと伝えていきます。危機感と重圧を持つと同時に、あなたの口から発する言葉でどう影響があるか、いらないことを発していないかも考える必要があります。屈しないために①神に向かう、歩む(神の子どもとして)(ローマ8：17、18)あなたは相続人、神の子どもです。行動に気をつけてください。だから神とともに歩んでください。「私は神とともに歩んできました」あなたはそういえますか。あなたの旅は必ず成功する旅ですか。アブラハムは試練の連続でしたがいつも困ったときに神と共にいました。②約束を信じる。あなたは神様とどう約束をしましたか。アブラハムは「このカナンの地で約束をする。あなたの子孫はこの地におびたしい軍勢になる」と約束されました。だからイサクを元の地に戻してはいけないといったのです。あなたはこの岡上で約束を受けたはずで、しかし私たちは問題が起こるとすぐに心が変わってしまいます。(ガラ4：22～28)「夫に捨てられた女の産む子どもは、夫のある女の産む子どもよりも多い。」(28)私たちは、滅び行く民の間で神様の花嫁を探さなくてはなりません。だから世の中のうまくいったものに目を向けてはいけないのです。「こうやったらうまくいったよ」という声に負けなでください。神様はあなたに「こうしろ」と言っているのです。屈せず、あなたにせよと言われたことをするべきです。あなたにされた約束をあなたの方法で変えないでください。神様はあなたとした約束をよく覚えていて、約束を果たすために約束を忘れず離れないでください。約束を果たしてください。③つぶやかない。「なぜ」「もうやってられない」私たちはつぶやいてしまいます。つぶつぶつ言うのをやめましょう。神の働きを止めることになります。(Iコリ10：9～13)「もし神様がいたら」はもうやめましょう。知っているのにつぶやくのはやめないとはいけません。キリストの地に入るためにつぶやくのをやめなくてはなりません。試練にあっていたとしても耐えられないことはありません。重圧を感じていないとしたらその責任を負っていないことになります。「偉大な」とは人に人生を示すことです。あなたも偉大な神の子です。正しい判断をして主と共にあゆみ、つぶやかず約束を信じて進んでいきましょう。(要約者：岩崎祥誉)